

〔資料館紹介〕

新渡戸記念館と新渡戸家三代

新渡戸 憲之

わが新渡戸記念館には、旧三本木、現十和田市の新渡戸家について数多くの資料を所蔵しているが、ここでは開祖傳、長男十次郎、孫の七郎、三弟稲造の三代を中心に、現在に至る経過にも若干触れながら、その一部を御紹介させていただきたい。

ただ自家のこと、甚だ汗顔の至りであるが、必要に応じてこれら三代の前後にも触れさせていただくことを御了承したい。

一 新渡戸氏の祖

新渡戸氏の祖は、遠く桓武天皇第五皇子葛原親王へと続き、この親王より高見王、高望となり寛平二年（八九〇）宇多天皇より平姓を賜わり、これが平氏の祖となったといわれ、当家の系図にも詳細記載されている。以来多くの変遷の後現在の千葉に居城し、千葉姓を名乗りその守護職となった。

源頼朝の覇業成った文治五年（一一八九）の頃、頼朝の奥州藤原泰衡征伐の際、十三代千葉常胤は東海道軍の大將軍として一族、下総、常陸の武士を従えていた。この時、下野国新渡戸の駅に於て泰衡の刺客遠田

三郎の闖入を十五代の千葉常秀これを誅し、その功により下野国新渡戸、高岡、青谷の三郷を賜ったという。

後、戦も終り、二十代貞綱の時新渡戸の郷に居城し、姓を一時千葉から新渡戸と名乗り、二十六代信盛より正式に新渡戸と改めたと系図書に書かれている。

このことは当家の系図の外、昭和二十三年十二月十日発行の栃木県那須郡川西町余瀬、蓮實長氏の「那須郡誌」中の「新渡戸駅と新渡戸氏」に記載されており、「新渡戸」の地名は後に「水戸部」と転訛されている旨書かれている。

昭和五十六年十一月、筆者は家内と二男を伴い、栃木県真岡市を訪れ「水戸部」に就いて教えを乞うた所、隣町二宮町に「水戸部」のあることを知らされ、町教委の係の御案内を頂いた。案内された家は直井稲造氏といい、二宮町に親鸞上人が関東総本山として創設された高田山専修寺の筆頭総代であられること、更に驚いたことには大正四年に農学博士新渡戸稲造大伯父が二宮町で講演後わざわざ直井家を訪れ、旧新渡戸家の歴史的史実と縁故調査をした事実がわかった。

この時直井氏の母親は妊娠中、翌五年の男子安産に際し有名人の来訪記念にとお名前を頂き「稲造」と命名した経緯がわかった。この母御様は昭和五十五年まで御健在であったという。私達の来訪が一年早ければと悔まれた。

直井家は立派な長屋門構えの格式高いお家、直井氏の人品骨柄の上品さに打たれた次第である。氏は現在もご健在である。

尚、旧新渡戸城の跡に「日天神・月天神」を祭る巨石があるとのこと

であったが、時間の関係で見ることができなかった。

当家の家紋は「月星」であるが、千葉姓時代から名前には必ず「常」の一字をつけていた。これは「常」は天子の御物で日月の模様をつけた旗を意味するとしている。

さて時代の経過とともに、新渡戸家にも多くの歴史的事実が残され、その研究解明にと心掛けているが、岩手県和賀郡下江釣子村に「新渡戸観音堂」が現存する。

山号寺号は人當山新渡戸寺。堂宇は三間四面、瓦葺、本尊は十一面観世音。當国（南部）三十三所の内二十七番札所となっている。大正四年（一五七六）和賀の領主多田薩摩守義春の臣新渡戸对馬守胤重（当家三十二代）これを建立。その後新渡戸家は南部氏の臣となる。延宝三年（一六七五）新渡戸佐五右衛門常政の代に、立花村昆沙門堂（旧国宝。現重要文化財として鞘堂に納められている）境内に観音堂を移した。

常政の女、吟女は二十九代南部重信の側室となり、後に松貞院といい、元禄十四年（一七〇一）江釣子村に御堂を再興された。後、常政の孫佐左衛門常顕の代、享保十五年（一七三〇）に、江釣子村御堂を再建の上、立花村より尊像を移し現在に至っている。

尚、「いわての名水」として新渡戸観音水（江釣子村）は湧水十九カ所の一つとして選ばれ、信者外一般人から愛用されている。

又、慶長年間三十三代春治トシハツの代、南部二十七代利直に仕え江釣子村に住み、花巻在高松村（現花巻市矢沢）を知行した。高松村は後に安野村といい、新渡戸家で志和稲荷神社の分神を祭り、後に新渡戸傳の代、正一位母安野稲荷大明神の神社を京都から頂き現在に至っている。

二 新渡戸維民これな

當家四十代。三本木後の十和田市開祖といわれる傳の父である。

明和六年（一七六九）生れ。父常賢（後に傳助）、母は太田五郎左衛門秀親の娘栄子。

剣と槍の道を好み、花巻から盛岡まで歩いて行き、要門（上杉謙信流の兵法）を学び、後兵法師範となり軍官を権征軍師湛泉剛弼と号した。

学者肌の維民は諸家系図の研究と要門研究に精励したという。

しかし文政三年（一八一〇）五十一歳の時、南部藩主三十六代利敏としとし薨じ、新藩主三十七代利用としとしとなり事態は一変する。この時藩財政上から花巻城改変の議があった。維民は純兵法上から花巻城の重要性を若侍に説いたことが、藩議反対主謀者と誤解され、半地取上げ（禄高没収）の上、即刻北郡川内（現在の下北郡川内町）に流された。年も押しつまた十二月二十五日、花巻出発という急なことであった。時に長男傳は二十八歳、孫の十次郎は六月十一日に生まれたばかりという幸な一家は、一転、不幸のどん底へ突き落とされたのである。

翌文政四年（一八二二）一月三日、維民は猛吹雪の中を歩きとおし、ようやく川内に着いた。これから許されるまでの六年間、文政九年（一八二六）まで失意の暮しを送った。

この間長男傳の献身的な父への孝養は、傳の「田名部住居の事」としての日記に詳細に記載され、また父維民も、この間、神明に誓った誓文の行間に、尊い精神が滲み出ており、父の生活ぶりがしのばれる。この

二文とも記念館に展示してあるが、後代の子孫として一読する時、誠に悲憤の涙に呉れるものがある。

天保八年（一八三七）六十八歳の時、花巻より盛岡に移転し、翌九年下ノ橋の鷹匠小路に移転した。天保十一年（一八四〇）七十一歳で隠居し痴翁と改名する。この年要門の著書多く、「要門内外伝」には、上杉管領入道不識院謙信輝虎朝臣より、代々の権征軍師各名が記入され、

「要門外伝」「要門勝建巻 全」「要門 日本武道外伝」「要門拾遺」外、多くのものが残され、筆者は良き師として、それらの資料を活用している。

天保十二年（一八四一）七十二歳となっても要門師範として熱心に多くの門弟を指導し、御褒詞を頂く。弘化二年（一八四五）七十六歳にて歿す。新渡戸家従来の墓所は花巻雄山寺にあったが、維民から盛岡へ移ったので久昌寺を菩提寺とした。

しかし花巻の兵友及び門人達は、花巻雄山寺に追慕の墓碑を建立した。痴翁墓碑銘撰者は権征軍師齧達栃内逢吉（要門師範と勘定奉行）、筆者は松岡一秀。この碑は現在当家の菩提所雄山寺に三十五の墓碑と共に現存されている。時々の墓参の折、特に熟読している。

三 新渡戸傳しんわとくでん

維民の長男は寛政五年（一七九三）花巻城で生れ、幼名を縫太といった。後、次郎八といい、傳と改めた。正式には新渡戸傳平常澄、太素は号である。

幼年時代は四書、五経更に七書を学び、天文学修得は一般の子弟より諸芸の遅れを取り戻した。所謂大器晩成型の人材として成長するが、新渡戸家の宗家であり、盛岡の家老新渡戸丹波とその母の慈愛に満ちた養育はこの家に寄寓したと相俟って傳の天稟に輝きを加えた。新渡戸家代々の要門勉学は必修であり、小向周右衛門の門に入り、兵学を修め十九歳で兩伝に入った。

二十三歳の頃は経世の才幹が出、十年の計は植樹が一番と、自ら杉苗を知行地高松の山地に植え、桑苗を宅地、城の要害、土手などに植付けた。

文政三年（一八二〇）、父維民が川内に流された時は早速武士の身を知行所高松村安野に因んで「安野屋素六」といい、「なま」の家号を名乗り、商人となり父の苦渋を忍び、自分から一文あきないに身を落した。

しかし後、江戸との往復をして毛潤を得ているが、この間の事情は「新渡戸傳一生記」九冊と「太素日誌」九冊に詳細日記として記録され、当記念館に保存されている。

田名部の豪商藤田三左衛門は何かと維民・傳親子に温かく援助しているが、よくよく調査すると、この三左衛門は若い時新渡戸丹波の中間として住み込み、武芸武道に励んだことがわかった。人間どこで誰にお世話になるか分らない。異郷の地といっても過言でない辺地川内で、縁故深い藤田三左衛門の親切は身につまされるものがある。

傳の商人としての機敏さは、野辺地に下り船の着く頃には、夜明け頃から海岸に出て沖を眺め、帆影が見えると握り飯を歩きながら食べ、五里の道を太平洋に至り、船の荷上りの時荷主と交渉し、他の商人と違っ

た先に交渉成立をし、有利な買付けをするという行動によく現れている。

また下北ひば材の有利さに利を得た結果、「川内の海商」として安野屋素六の名が知られるようになった。しかし文政七年（一八二四）はひば材の下落により奥瀬村（現在の十和田湖町）に入り、地頭奥瀬内蔵に山禮金一カ年五十兩を納め、十和田山に入り樺、桂等を伐採した。この時田名部から杣方人夫を集めている。

その頃十和田湖は信仰の山として出家、修験女の入山はできず、里人は船、蛇、赤、八等の言葉さえ忌にしていた。到底船を浮かべることはできなかった。傳は祭文を読み上げ神意を慰め、人夫、杣夫等が忌言葉を使っても神怒のないよう祈願した。こうして始めて船を湖上に浮かべ、食料品、資材外運搬上大きな利便となった。

従来天明年中は江戸栖原屋武兵衛、寛政年中田名部、熊谷又兵衛、文化初年飛弾の大野屋茂八、文化中頃伊勢白子の田村屋外、文政初めには羽州大館の金成寅之助達が十和田山に入っているが何れも二、三千兩欠損の上引揚げている前例がある。これは皆船の利用ができなかった為である。

傳の思い切った湖上船運行の成功は入山した山師達最初の快事である。後年実施した三本木原開拓より三十余年前の文政九年（一八二六）、傳三十四歳という少壮血気盛んな時代の成功であった。勇氣、発案共に十和田湖開発者第一号としての存在は実に大なるものがある。

今日年間二百五十万人の観光客を迎えている名勝十和田湖で、百六十年前の秘められたこの事実を知って行く人は居るであろうか。また地元湖畔業者でこのことを語り継いでいるであろうか。今は昔。忘れてなら

ぬ秘事でなからうか。

十和田山の良材は、銚子の大滝を下し奥入瀬川より百石、市川口へ流し、八戸より船で江戸へ積み出した。

この頃沢田村（現在の十和田湖町）の酒屋左内、切田村（現在の十和田市内）の気田左衛記、藤島村（現在の十和田市内）の肝入弥兵衛、百石村（現在の百石町）の伝之丞、市川村（現在の八戸市内）の源右衛門と宿を決めて度々泊っている。八戸城下では親類の新渡戸頼右衛門宅へ泊った。また江戸深川の木場町升屋善兵衛らと取引をし、「十和田の新渡戸」といわれるようになった。

更に先進信州御嶽、遠州千頭山に登り、川流し瀬切り法を習い、駿州田代山で狭手の組方を学んだ。千石船の融還丸、運光丸を買取り江戸の材木商人と巾広い交遊をした。

こうして三本木原を度々往復し、不毛の地、手の入れない広大な荒野をそのまま放置しておく南部盛岡藩の愚をなじり又国家的損失を非常に惜しがり、いつしか三本木平の開拓への念願を抱くにいたったのである。

天保四年（一八三三）四十一歳の時、二月から十一月にわたり上方漫遊をし、三国湊の三国与兵衛から救荒策を聞き、宮越の銭屋喜太郎（注・喜太郎は文化五年一八〇九生れ、銭屋五兵衛の長男。文政八年一八二五家督を継ぐ、五兵衛五十三歳の時）宅止宿の上、国許の救助米供給の約束をし、各地の開拓地、上水、開田の仕法を実地に調べ研究し、後日の開拓に備えた。この十か月にわたる実地研修の旅は二十二年後の安政二年（一八五五）三本木原開拓着手にどれ程役立ったか分らない。

天保八年（一八三七）四十五歳の時、新渡戸本家より分地を得て六十石高となる。

翌天保九年（一八三八）四十六歳といふかなりの年配の時、公儀の巡見使が北海道から来ることになり初めて人馬役割の任についた。この時も兵法軍法によって、巡見使が松前の港を出帆するのを見て、繫箒けいこうの法を用い、箒火をたいて下北の九艘泊から手滝、野台、福浦と順次に合図をもって知らせる方法を取り、従来よりも経費の節減をはかった。

この年には讒言によって籠居の身となったが、その間「歴代武家略伝」「改正諸家系譜」八〇余冊を自書し、前々から念願の系図研究の集大成を計っている。この苦心の簿冊は今日筆者にとつて最良の家系研究資料であり、各氏、各地の武士、給人等、又、当地方一戸、三戸、五戸、七戸、田名部の各氏の系統を知りうるものとして活用されている。

弘化三年（一八四六）岩手、紫波、稗貫、和賀の各郡を巡り、開墾適地を選んだ。

更に地元北郡相坂村（現在十和田市内）と犬落瀬村（現在六戸町）の一部であるが、安政二年（一八五五年）傳翁三本木原開拓より五年も前に、宗家新渡戸佐金吾しんご因幡ともいふ（盛岡藩家老新渡戸丹波の曾孫）名をもって開田した。相坂村老名おとな犬落瀬村老名外記入の「御先立御約定始末之事」等は当記念館に保存展示している。

嘉永元年（一八四八）五十六歳の時勘定奉行仰付けられ藩の重責を果たした。

当家には御勘定所秘書、郷村古實見聞記、一郡一村斗代歩付御定目、御勘定所諸役処任様付等の簿帳が残され、勘定方仕法についての好資料

である。更に「陸奥国盛岡領郷村高辻帳」嘉永七年（一八五四）記録南部美濃守〔注・嘉永七年は十一月二十七日より安政元年と改元〕を見ると、盛岡藩中全四百四十九カ村都合二十万石中、内、北郡は五十カ村一万千七百七十七石二升三合あるが、この中の一寒村に当時の三本木村は高僅かに四十一石三斗九升五合と記載されており北郡の下位である。こういう最低の見るかげもなかつた荒蕪極まりなき無益の三本木原に着目し、勘定奉行中に、新田開拓を献言したが、ここまで傳を魅了したものは何か。

安政元年（一八五四）盛岡藩はようやく開拓のため十カ年士の制度を取った。これは藩財政整理のため、寛政以後召抱の士に対しては家禄を取上げ、その三分の一を十カ年間給与し、その間奉公を全うし得るものだけを再び十分に取立て、また新田開発を願出て成功したものにはその分を家禄として、十年を経なくとも十分に列せさせるといふかなり思い切った方策であった。このため新地開墾熱がおこり、三本木原開拓計画も理解され、同志を集め、出費者は盛岡を始め黒沢尻、花巻、三陸の大槌、宮古から八戸、五戸、七戸、野辺地、田名部方面からも集った。

安政二年（一八五五）八月、三本木新田願は藩士より許可され、傳翁は新田御用懸りとなるが、年既に六十三歳という高齢であった。

計画 一、三本木原―太平洋沿岸まで三本木台地の一番高い所へ人工河川を掘り抜き上水させる。

二、面積二千五百町歩という広大な開田。

三、最初は三千石開立、次いで一万石とする。

四、第二上水完成時は十万石、更に十五万石とする。

五、小川原湖、下北方面の開拓も含める。

この五点が開拓上水の骨子であるが、水源地奥入瀬川（現在は相坂川という）と三本木原との高低差は十丈（三十m余）という従来誰も手を入れることのできなかった難所であり、その計画立案には細心の注意が払われた。

上水の末端地三十軒先太平洋岸の百石村、深沢、一川目、二川目、三川目へは何れ後日水路の接続を期し、十月一日に最初に開拓に着手した。

安政三年（一八五六）前年着手の熊ノ沢↓矢神間一四二二間（二五四〇m）の墜道は完成したが、上流、下流からと横穴から掘り進む工事は当時不可能といわれ、世人の一人は「三本木原に水が上ったら、自分の尻で『くるみ』を割って見せる」とまで言っている。

傳翁の計画は見込通り墜道完成となったが、盛岡から再び勘定奉行へと召され、安政四年は長男十次郎が後継者として交替し、三本木新田御用懸りとなり、十五歳と成人元服間もない長男邦之助を伴って来た。前の墜道の上流、法量↓段ノ台間九〇〇間（一六二〇m）の墜道完成、両方合計四一六〇mという当時珍らしい難工事、長距離の水のトンネル成功は、如何に測量技術と人夫使用を始め、諸計画に優れていたかを物語るものである。

安政五年四月二十四日仮通水を行い、単穴の発見により再び修復。安政六年（一八五九）五月四日に完全上水成功。水なき三本木、人の住めない三本木は遂に水流れる里。将来への理想郷建設へ向い平原三本木原へ大動脈の貫流となったのである。

開祖傳翁の不屈の精神、長男十次郎の理想案、嫡孫邦之助の実行力、

十次郎の弟太田家を継いだ時敏（後の稲造の養父）、傳翁の五男收藏外新渡戸家一族、各出資者、地元外各方面協力者協同一致、団結の結果である。

安政六年の上水道通水後六年を経過した慶応元年（一八六五）検地が行われたが、三本木村は四百四十四石余、相坂村四百二十五石余、百石村までは当時通水しないが開拓しているので五十八石余、合計三か村で千石の実収となり、如何に上水の必要なことか、荒地といっても通水により三本木原の収獲の確実なことを実証した。この三冊の検地帳は貴重な記録である。記念館に展示してある。

百石地方開拓の為一川目〜四川目まで、海岸通に防風林百間中の松植栽の絵図面が残され、道路も五十間巾の大型である。数千本植立の見事な防風林が明治二十九年の三陸津波により押し流され、現況は残っていないが、古老は「百間松と五十間道路」のあったことを確言している。津波後直ちに傳翁設計の防風林復活をこころみていれば、ヤマセと八甲田風は充分防止されていたらうものを。なお、傳翁の水路は六川目まで通水計画の絵図面が残されていることを加えておこう。

開拓測量工具としては水丁規、方位器、勾配器、梵天、間縄及びつるはし、のみ、金槌、こんばづる、中づる、ばんづる等があるが、これらの大部も記念館に展示している。

万延元年（一八六〇）南部盛岡藩主第四十世利剛としよしは三本木原開拓状況並びに新駅を視察され、新駅は「稻生町」、人工河川の清流には「稻生川」、橋には「稻生橋」と命名され、現在まで続いている。

ヤマセと八甲田風の防御策は防風林植栽以外ないことは傳の天保九年

時代、三陸大槌、宮古、野田外五戸、七戸、野辺地、田名部七か所の御山奉行時代既に「I」型の鍵の手防風林を各所に設定して効果のあることを証し、更に三本木町に四十九か所の「II」型を植立てたことは「新撰陸奥国誌四巻」三本木の項に証明されている。明治十七年軍馬補充部が三本木にできたが、傳翁造成の防風林を残し、更に軍馬特有の防風林を植栽しており、大樹として一部ではあるが現存している。

人心教化、民心安定の爲稲荷神社、澄月寺、理念寺建立を始め、十次郎と共に上杉流兵法による広大な十二町四方の都市計画、産業開発、更には下北大畑川、正津川に囲まれた地点の開田まで測量計画している実測図が残されており、記念館に展示しているが、国土計画ともうべき雄大さは一驚に値する。

安政二年から明治二年までの総人夫は二十一万五千三百三十一人、総費用十六万五千兩の記録は事業の広大さを物語っている。

明治維新を迎えての新政府下までには幾多の辛苦があり、御目付郡奉行、野辺地戦争とその処理、七戸藩新設と共に七戸藩家老として「かご」で三本木―七戸間往復。次いで七戸藩大参事、凶作につき難民救助のため上京と共に国営陳情等老齢の身とはいえ休む暇のない程であった。更に斗南藩窮民三百軒交渉により百軒引受けの大決断は旧会津藩の人々に取って大きな援助救済となった。

明治四年、時代の変革と行政改革等新時代の黎明を自分の目で見極め、三本木永遠の発展を願い、七十九歳という多彩の人生を閉じた。死の五年前既に太素塚を墓地と定めていたが、杉等三百本自分で植えた丘陵の地に埋葬された。青年時代から一生を通して植林家としても歩み続けた

傳翁の終焉の地として誠に相応しい。

傳翁の秘話として文久三年（一八六三）七十一歳の時、御邦深山幽谷の住民 無名老人識 として「夢中翁嘉言」を前編卷ノ一、卷ノ二、卷ノ三、卷ノ四、卷ノ五まで大冊自分の思うまゝ見事に産業、経済、政治、教育、仁政、盛岡藩の不仁政に至るまで筆の向くまゝ書き通している勇氣を偉とする。

明治二十五年六月二十日出版農商務省の「大日本農巧傳」は二百九十五頁にわたり、全国の農功者を記載しているが、全員一六九名中東北人は二十三名紹介されている。この中に傳翁の事績が掲載されていることは誠に感無量なるものがある。

四 新渡戸十次郎

傳の長男は十次郎、常訓。

天保五年（一八三四）十五歳の時、盛岡藩主南部利剛より号を受益堂謙斎と賜り、その命名書は記念館に展示している。

天保七年（一八三六）十一月十日、十七歳の資料には「甲冑傳」として「柳生心眼流甲冑傳 十八ヶ條当流之深秘奥書」が師範高橋治郎右衛門より新渡戸十次郎宛与えられている。当家保存。

勉学の為十九歳の時江戸に登り、後中奥小姓となり藩公より紋付、袴を拝領した。藩公の御供として度々江戸に登り、江戸勘定奉行となるが「南部の花侍」といわれた。

要門兵学では藩主の御相手を申し上げた。

盛岡藩には優れた武道、竹内流、柳生心眼流、諸掌流、大東流の四流派があり、十次郎は柳生心眼流（甲冑組討を主体とする総合武術）を学び、嘉永五年（一八五二）三十三歳より伝承者として記録されている。新渡戸十次郎より村井源吉常務（嘉永六年より）へと受けつがれたが、村井は明治二十年に没している。このことは松田隆智編の「秘伝日本柔術」に記述されている。

更に盛岡藩外不出の「御留め武術」として伝えられた柔術で、「柔」の字は用いず、「和」の字を用い「やわら」と称した諸掌流にも優れ、子供の時から父傳の指導を受けていた。性は豪快闊達であったという。

文武両道として和歌の道にも通じ「安の屋集」七十六首、「安の屋のつとひ」四十七首、「川保利集」八十二首計二〇五首が夫々三冊に美しい文字で書き上げられている。この三冊は記念館に展示している。更に茶道は京都時代、千家の知遇を受けている。

嘉永六年（一八五三）三十四歳で家老、奥勘定奉行兼帯仰付けられ、次いで勘定奉行となったが、若冠三十五歳であった。

父の傳翁が勘定奉行の頃、十次郎は留守居側目付という役で、父より役柄が重かった。この時ある人は翁に『あなたと十次郎氏は、格の上下が顛倒している』というと翁は『世の中のことは、概ね芝居のようなものだ。鏡山で子が尾上となり、父がお初となっても何も不思議でなからう』といったという逸話がある。

安政二年（一八五五）父傳翁が三本木原開拓着手の頃、十次郎は盛岡藩持分の箱館及び東蝦夷地の御持場見分を命ぜられ、箱根へ出張し、御用中表目付陣場奉行兼帯となり、箱館エトモ等の陣営建築に成功して十

月に帰国、その功により祿を拝領した。

盛岡藩の警備区域は、箱館表山岬を主として、恵山岬東蝦夷地幌別まで海岸一帯の地を持場とするほか、東蝦夷地全部の応接を兼ねるという任務であった。当時盛岡藩土上山平右衛門・新渡戸十次郎は箱館奉行へいろいろ計画書を出しているが、その間の記録は「安政二年四月 松前持場見分帳 新渡戸十次郎」厚さ四センチに及ぶ大冊で四月廿五日より十一月廿五日迄の記帳に詳しい。又、松前図、箱館図外東蝦夷地外カラフト絵図まで書写してあり、北方領土として四島の記録もあり、貴重である。国会関係者にも報告済である。

更に後下北半島一円警護のため、野辺地、易国間、尻旁、脇野沢、泊、大畑、大間、佐井に各御台場を築立し、十次郎工夫のゼンジャー砲を設置した。これら各御台場の計画図は当記念館に保存している。安政三年（一八五六）には野辺地御台場築造のため、野辺地町から海岸まで新道をつくり「新みち」と今日でも称している。

この年は三本木原上水への第一閘門である熊ノ沢→矢神間隧道完成後、父傳翁は御勘定奉行仰付けられ盛岡へ帰ったため、翌四年十次郎が父の後継者となり三本木新田御用懸り仰付けられ、長男邦之助（十五歳）を同道する。

第二番の隧道である法量→段ノ台取水口となる九〇〇間（一六二〇m）が完成し、更に京ノ館の深堀五八〇間（一五〇〇m）深さ三丈五尺（一〇m）という難工事に着手した。次いで三本木までの平堰（平堀りという）一九〇〇間（三四二〇m）の難工事完成。新大橋たる稻生橋の架設工事後、多くの苦心の末安政六年（一八五九）五月四日、人工河川

「稻生川」の水完成し、三本木原頭の命の水ともいわれる緑水の大動脈となった。

十次郎の兼ねての念願は構想大きく、六尺五寸を一間巾として京都を模した十二町四方の「都市計画」を上杉流兵法に基づき実施したことである。モデルの京都は六尺三寸を一間としていたので、如何に三本木の寸法は大きいか、田舎町にも拘らず壮大な方策としたことは父傳翁が息子十次郎の夢を大きく叶えて上げた親心の実現に外ならない。

稻荷神社、澄月寺（曹洞宗）、理念寺（真宗大谷派）の建立を始め市場、馬市場、表通り総二階葺き家新築外新構想を活かした新駅にふさわしい各方式は旧周辺村々の遠く及ばない活力が溢れていた。今日六万千以上の人口増となり百三十年の短かい経過で現況を迎えたということは当時の基礎づくりが確実であったことを証明していよう。

十次郎のもう一つの願いは文久元年、二年にかけて小川原沼視察、むつ湾巫女沼から鷹架沼へかけて「むつ運河」を掘り通し、尻屋岬を回る渡海の難を省く計画を立てて実施したが、この時も勘定奉行、元締となり、江戸詰を命ぜられたため、実施はたった四丁（四三二m）を掘っただけに終わったことは誠に惜しいことである。

文久三年（一八六三）目付兼帯御用人、元締兼務、御用銅に功があったが、四十四歳であった。盛岡藩産銅について書く余裕はないが、主な産地は鹿角郡白根、立石、鹿角、楨山、鶴（トキトウ小坂）、尾去沢外があり、銅一枚は十貫三百目とされ、鹿角産の製銅は十貫目を標準として厚板に作ったという。これは駄送上の荷造りから生じた標準であった。当時十分の一奉行とは産銅を検閲する役人のことである。又銅六貫目を

一両とした。尾去沢産の銅は牛で駄送り、盛岡に集め北上川より石巻へ川船にて下し、石巻港より海上を大坂に廻送した。又一方では費用、支障外いろいろ事情により尾去沢から来満峠を越え三戸郡田子へ出、三戸、三本木へ出「牛泊」という、現在も地名と遺跡が残されている地点を経て、街道筋へ駄送の牛は泊った上、野辺地へ運び、更に港から大坂へ送ったという。多くの資料が残されている「銅の道」である。

元治元年（一八六四）四月十次郎四十五歳の時、「京都御用向取調帳」によれば、

- 一、御銅山御仕送金唯今迄老万式千両之処三万両相成候事、
- 一、大坂御仕法御相談向取調候事、

とあり

覚

- 一、荒銅六拾万斤程

内

- 一、式拾万斤

但百斤ニ付、代金拾兩宛

と記されている。

- 又、同年五月の

「御用銅地売銅」文化元年（一八〇三）〜文久三年（一八六三）〔六十年間〕の記録

覚

文化元年 一荒銅三拾七万七百三拾三斤式歩

文化二年 一荒銅四拾万 式百斤

文化三年 一荒銅三拾五万七千五百五拾斤

文政元年 一荒銅七拾壹万五千四百貳拾五斤

天保二年 一荒銅七拾四万四百斤

嘉永四年 一荒銅五拾八万八千四百五拾斤

安政六年 一荒銅六拾四万五千斤

文久元年 一荒銅六拾万五千貳拾五斤余

文久二年 一荒銅四拾五万三千三百七拾五斤

外 貳拾壹斤東海道江戸納之分

文久三年 一荒銅三拾三万斤(途中省略)

が残されている。

又 戊亥(戊||文久二年||一八六二・亥||文久三年||一八六三)

御願書之写

乍恐書付を以奉願上候、

銀 百五拾貫目 同 貳百貫目 同 三百貫目

同 五百五貫目 同 六百貫目

合計 銀千七百五拾五貫目

文久二年戊四月

草間 伊 助 ㊦

(後の鴻池のこと)

神 右内様

今淵定藏様

馬場慶作様

一、銀 覚 外 壹万三千七百四拾四貫貳拾三匁壹分七厘九毫

等関係書類が保存されている。

最近各方面で南部銅の研究が進められ、江戸末期時代経済発展上大きな原動力となった東北のこの地方が再認識されようとしている。更に当館の資料が注目され、学者、報道関係機関の研究に役立っていることは誠に意義深く、当時活躍した十次郎の御用銅直増の功抜群と記録されている意味が理解されよう。

元治元年(一八六四)四十五歳の時御用勤掛、鉄鉦山掛を命ぜられ、大坂、京都へ行くが、三本木稻荷神社の為に立派な神輿、祭具を購入して、日本海回りで野辺地港から三本木まで送り、三本木開拓加入に就き東本願寺を説き廻り、後に鹿角郡白根村に廃寺として残されている理念寺を、藩の許可を得て三本木へ建立し仮屋として完成させた。幾多の経過の末今日百二十年後立派に本堂完成を迎えたことは、先人先達の夢を見事に達成させたといえよう。

傳、十次郎、邦之助の父祖三代の名をもって三本木原第二上水計画を企画発表した論文ともいえる「三本木平開業之記」は万延元年(一八六〇)秋、関係朝野に配布したが、この主筆は十次郎である。識者は今日この論陣と特に「物産開業之仕方」の具体策の殖民政策に注目し、盛岡藩中の出色と評価して下さっていることは子孫として有難い。

しかし後、江戸用人勤役中、領内の生産絹を税に取り上げ、直接フランス人に売り、その収益の一部を三本木原開拓の事業費に当てようとの献策が、かえって誤解を受け、讒せられた。これが原因となり遂に病の身となりたれこめてきりもかしこし世の中を

吹きすさひ行く木枯のかせ

と辞世の一首を残し、慶応三年（一八六七）四十八歳のまだ若き惜しい人材を失った。盛岡の菩提寺久昌寺に葬った。

長男邦之助は明治二年、南部利剛より七郎の名を拝領したが、明治五年、当時三本木村人に非常に慕われた十次郎の為に、特に熱心な安野清兵衛、高岡権十郎らと計り、御位牌堂を建立し十次郎霊位を祭り照瑠堂といった。

父傳翁の墓所太素塚右脇に安置した。後昭和二十九年、盛岡久昌寺より分骨してお墓を建立したので、前の照瑠社は開墾協力者の御位牌堂とし、更に現在は立派な神殿造りとし顕彰堂といっている。

父傳翁は水路設定拡張、開田開畑へと実務実質型を念じたが、嫡子十次郎は理想絵輪型とも申すべき夢多き企画情熱型といえよう。

著書論考、草稿の紹介のいとまはないが、残されている著書「御国益考」六冊及び「桜花夢物語」外遺品にその思考の深さを偲ぶことができ

る。
後年、歴史学者は盛岡藩で明治維新後も楢山佐渡（筆頭家老）目時隆之進（藩家老）新渡戸十次郎の三名が存命であれば、岩手県が発展と共に三本木を中心とする青森県の伸展は又変わっていたらうと論じている。

五 太田時敏

傳翁の四男時敏は後に親類太田秀壽の養子となり盛岡に移る。中興小姓使番目付、利剛に供奉し、東京に登る。戊辰之役には小隊長として秋田

戦争参加後盛岡藩権少参事。後上京南部家家扶、家令として明治四年より十年間奉仕し、伯爵南部利淳（トシチカ）に仕え、当時赤字財政家計を良く建直し黒字財政へ改善した功勞者である。このことを一番理解した人は原敬である。稲造の姉喜佐（河野孝忠の室）の娘小林愛子伯母（福助足袋重役夫人）から筆者が直接聞いた話では、一時「時敏堂」という洋服屋を開く程の時代の「さきがけ」をやり、十代目市川団十郎の洋服を作り、銀座の最初のモダン西洋式住居建設に従事したり、銀座の柳植立に参加したという。

自分に子供がないので、兄十次郎の三男稲造を十歳の時養子に迎え、稲造と改名させ傳翁使用の「駕籠」（背もたれ、肘掛けつき。後年明治維新後七戸藩創設、七戸藩家老として三本木―七戸間往復に使用したものの。当記念館所蔵）に、次兄道郎と一緒に盛岡から東京まで十一日かゝって上京させた。明治四年のことである。太田稲造となった少年の勉強は養父時敏の指導よろしきを得て大きく成長する。後の稲造博士である。

時敏は有馬大警部後警視大隊一番小隊長として宇和島に滞在し、西南鎮静の後帰京し、権少警部、少警部と昇進し、赤坂警察署勤務後岩手県下郡長を歴任する。

有島武郎の結婚仲人をしたことを知る人は少ないが、旧盛岡藩の若人の面倒を良く見ると共に、新渡戸家関係者の若者は皆時敏叔父の指導と青春、新時代の意気吹き込みの影響を受け、又親戚女性従姉妹同士もいろいろと世話を受け、慈父のように慕われたと小林愛子伯母は私に語ってくれた。

太田稲造は明治二十二年長兄七郎の逝去により、ドイツから帰国、新

渡戸稲造と新渡戸家に復帰する。時敏は稲造博士の三本木訪問と共に度々三本木新渡戸家、同じく太田家へ来ているが、残されている写真を見ると体格優れた武士然と風格は父傳に良く似ている。

新渡戸稲造の代表著書英文武士道の序に

“過去を敬うことならびに

武士の徳行を慕うことを

私が教えた

我が愛する叔父

太田時敏に

この小著を

ささぐ

と書かれてあるが、農学・法学博士号授与以前の言葉として、かつての養父への真情籠めた“心”の言葉として誠に含蓄がある。

時敏夫妻の墓は青山墓地。大きく二碑が見事に立ち並び往時の良き時代を物語ってくれている。

稲造博士が新渡戸家復帰後は当家の父訓の兄海軍少佐常利が太田家に入り稲造なき後の太田家を継承し、その子孫は多く続いている。

六 新渡戸七郎

新渡戸十次郎の長男として天保十四年（一八四三）盛岡で出生。

幼年から四書、五経の外七書を精読し、嘉永七年（一八五三）十一歳の時、幼名四五六といった当時馬術に通じ、師範佐羽内勇右衛門（寛紀）

より「切礎不怠可有膽練者也」の感状を授与されている。

安政四年（一八五七）十五歳の時元服して父と共に三本木に来る。この時邦之助常光という。

安政六年（一八五九）十七歳の時、「諸賞流和小具足修行丹精」につき師範川井泰右衛門より「感状目録」を頂き、何れも当家で保存している。

三本木原開拓には父十次郎と共に十五歳時より来たことは前にも書いたが、中振の開拓所に滞在し、祖父の志を継ぎ粉骨碎身良く事業に従事した。特に矢神↓三本木間の平堰千九百間の新堀通し工事完成。更に高清水への難工事の深堀開拓となった。赤沼、晴山、忠兵衛堰分堰測量等に精励した。この年五月四日、稲生川上水完成の喜びを少年十七歳で味わい、体験したことは、後々の諸工事への大きな原動力となった。

文久二年（一八六二）二十歳で兵学稽古の為江戸へ登り、盛岡を往復した。中奥小姓となり、南部利恭、英磨としやまの兵学御相手となったのは慶応三年（一八六七）であるが父十次郎にはこの年二十五歳で別れるという不幸を背負った。やがて維新となり明治元年二十六歳の時三本木新田開発御用懸仰付けられ、翌二年二十七歳で利剛より七郎と名前を拝領し、この命令書は記念館に展示してある。又、この年盛岡藩から弘前藩への使者となり、新政府の重要任務を遂行し、盛岡藩少参事となった。

明治四年祖父傳翁の死後、岩手県職員を辞し、青森県出任を願う三本木に移り、七戸出張所管村授産掛拜命、三本木出張所詰となる。

祖父傳時代明治三年村上二学との約束による元斗南人百軒引受けに精励し、開拓地所割渡し、新建設家、資金、資材渡し等救恤の途は旧会津

藩人に大きな救いとなった。もしここで引受けなかったら難民は更に北の辺地へ流れ行き、その悲惨さは倍加したであろう。

明治十一年、三十六歳の時九月に出版された福澤諭吉著の「通俗民権論 全」を写本製本している。和紙三十八枚に丁寧綺麗な筆書で活字の様に、目録、緒言、本文第八章まで書き上げている。縦十八センチ、横十二センチの小判ながら時代の先端を行き民権論を学んだ七郎の気魄を体得できる。

明治十二年、三十七歳内務省勤農事務取扱、福島県下出張以来猪苗代湖安積疎水工事を担当した。

農商務七等属 新渡戸七郎

安積疎水掛事務取扱申付候事、

明治十四年七月廿九日

農商務省

と書かれている三点の辞令の外、更に明治十六年山口県出張鹿背坂隧道工事従事、「隧道工事中負傷者取調細明表」や「各隧道賃金早見表」

「安全爆烈薬用法 全」外の資料が現存し、水郡線「月居隧道工事雑書」の詳細書が保存されている。ここは袋田温泉のある所であるが、後に末弟稲造が明治十七年東京大学を退学し、八月二日に月居駐在の長兄七郎を訪れ、アメリカ留学の決意を述べ、稲造渡米の決意を喜び三百円を与えた記念すべき土木事業出張先ということになる。稲造から峯姉上宛の手紙にはその間の事情が詳細報告され、理解ある兄は、月居峠つきがたの麓の袋田温泉に案内し、大滝を見てしばしの別を惜しんだ。しかしこれが一生の別れとなったのは後のことである。

七郎の安積疎水工事資料が当家に保存されており、本年十月福島県立博物館が会津若松市に完成され、二階安積疎水コーナーに七郎の資料が展示され、かくれた工事者として幸にも紹介されることである。

後、明治十九年内務属那須原土木局出張所在勤、那須原疎水工事を成就させたが、当家にはこの時西郷従道より七郎へ「三本木原開拓で父祖と共に従事した体験を活かして、この地の成功にも精進せよ」との言葉を頂戴したと伝えられている。この工事完成後辞職し、帰京後新渡戸一族を中心とした土木会社「現業社」を起し、日本最初の鉄道工事を請負、長野県・青森県・岩手県下等出張した。東京から盛岡まで完成していた当時の私設鉄道の代表日本鉄道を盛岡から青森まで開通すべく、請負率先従事し大いに進捗した。特に岩手県二戸郡福岡と一戸との間にある鳥越トンネル（一〇〇〇余m）工事中に病氣となり、明治二十二年四十七歳の若さで亡くなり、菩提寺盛岡久昌寺に葬った。

この功績は同寺山門を入り左側に大きく「新渡戸七郎君碑」として建立、顕彰されている。

丁度この時末弟稲造はアメリカに次いでドイツ留学中であつたが、先に次兄道郎、更に長兄七郎の死により新渡戸家の後継者を失つたため、帰国。太田姓から元の新渡戸姓に戻り、新渡戸稲造となった経緯がある。この計らいをしたのは太田時敏であつた。七郎には子供がなかったのである。

七郎在世中の明治九年七月十二日、明治天皇東北巡幸の折、三本木新駅六丁目の旧開墾取扱局（現在の青森銀行十和田支店の場所）を御小休所となされ、開拓の祖傳翁の遺業を御嘉賞。遺族傳翁の末子ムコ三木人

に拜謁見仰付けられ、下賜金を賜り、斯業に精励せよとの言葉を賜った。

明治十四年八月二十五日再度東北巡幸。北海道に向わせられる途中再び三本木にたちよられた。旧新田会所、新渡戸家を在所として仮泊され、遺族三木人に白羽二重一疋と下賜金を賜り、遺業と継承せよとの言葉を賜った。

尚、この時有栖川宮には炎熱下、乗馬にて開拓地の水源にさかのぼり、点検された旨詳細記録されている。

この時七郎は盛岡で床にふせ、三本木に来れなかった。傳翁四天王の一人で三木人の後見役であった中島庄司は、明治天皇行幸の名誉模様の報告に行った。七郎は神棚に燈明をともし、病床の上に紋付、羽織、袴を掛け恭しく報告を受領した。この時の模様も詳細記録されている。

後昭和十六年五月十二日、三本木大火の際当家は類焼にあい、名誉の行在所は焼失したが、「行在所」標札はようやく持ち出され難をのがれた。現在記念館に保存、展示されている。

七 新渡戸道郎

十次郎二男は安政六年（一八五九）生れの道郎である。明治四年十三歳の時、弟稲造と共に「かご」で上京。叔父太田時敏宅に寄留し最初英学を学び、後、大蔵省検査寮勤務、明治九年農学者津田仙創立の日本最初の私立農学校「学農社」に入學、農学を専攻した。

この農学社に入學した根本は、三本木新渡戸家旧開墾取扱局に明治九

年、明治天皇行幸の折、農業につくせよとの言葉を賜ったことである。このことは弟稲造の進路変更にも関係するが、長兄七郎は父祖の業を継ぎ開拓者を志し、道郎は実学農学を修めたい念願で熱心に勉んだ。

明治十年西南事件に際し徵募巡查を志願し再度上京、新撰旅団第八大隊に編入するという勇武の道も歩んでいる。九月解職、慰労金の恩典があり盛岡へ帰った。

十一年六月十二日分家し、三本木新渡戸当家の戸主となった。十七歳年上の長兄七郎には子供がなく、弟稲造は太田家へ養子に行っているので、兄は後年道郎に本系を継がせる内意があった。

明治十六年七月、岩手県御用掛に拜命されたが、後病となり、翌十七年二十六歳で死去した。久昌寺に葬る。親類相議し、三本木の傳翁の娘わかかに三戸より養子良助を迎え、道郎の後嗣とした。

良助は漢学者。一時青森県庁勤務、当時の小学校先生採用官として活躍し、後三本木に帰り、開祖傳翁の墓を守り新渡戸家当主として又、三本木区長として長く勤めた。その子訓時代、新渡戸記念館の前身私設新渡戸文庫創設に新渡戸稲造博士、兄太田常利と共に貢献し、貴重な開拓関係資料の保存に尽力した。

八 新渡戸稲造

稲造の幼名稲之助は、十次郎三男として文久二年（一八六二）盛岡で出生の時、三本木新田で新米四十五俵初収穫に因み命名された。

後、稲造と改名、叔父太田時敏の養子となる。東京英語学校時代の明

治九年、明治天皇三本木巡幸時の下賜金により、英文聖書を求めたことは稲造一生の糧となり、更にまた陛下の言葉により一身を農事に委せんと札幌農学校に転じ、第二期生として卒業する。

学問への研究心は明治十六年二十二歳、東京大学を受験、「太平洋のかけ橋」を念願して入学したが、米国への私費留学、アレゲーニー大学に入学後、ジョン・ボブキンス大学に転学三年間経済学、史学、文学等修業した。真の目的は農政学研究の為、更にドイツに三年間留学、ボン大学、ベルリン大学、ハレ大学等に於て農政、農業経済学、農業史、農政学、統計学の研究中、明治二十二年長兄七郎死により新渡戸姓に復帰のことは前記した。

アメリカ人メリー・エルキントンと結婚し帰国。札幌農学校教授の後、明治三十二年三十八歳の時日本最初の農学博士となる。英文武士道出版により国際的に名声を博し、日本国及び日本人の信用を高めた。更に法学博士となり、明治三十九年四十五歳第一高等学校長として七年間近代教育を施し、新日本建設への国家的人材養成に大きく貢献した。

大正九年国際連盟事務局事務次長となり、国際平和に尽力しドクターニトベの名を高めジュネーブの良識とまで評価された。

晩年は昭和七年の松山事件やら、国際人として生活した稲造博士の真意は当時の世相には理解されず、昭和八年カナダ国バンフに於ける太平洋会議中発病し、十月十五日（日本十六日）七十二歳でその人生を閉じた。

同年五月、天皇陛下に三回御進講申上げる光栄に浴し、三本木の祖父の墓所太素塚へ報告の時「もし他地で死亡の時は祖父傳翁のそばへ埋葬

して呉れ」と持参のステッキで丸を画かれた。この状況は当家の亡祖母わかを初め、現在九十六歳の場清氏外証言している。又その時の写真には記念館に保存している。

太平洋往復十六回に及ぶ「太平洋のかけ橋」の念願は遂に達成できなかったにしても、三本木へは九回訪れた。新渡戸わか初め一族多数の三本木は懐かしく、こよなく愛した。講演、揮毫の外大正十四年、私設新渡戸文庫の創設は、祖先ゆかりの開拓資料の保存と多くの蔵書提供と博覧啓蒙により当時の三本木の文化的水準を高め、今日の新渡戸記念館の基礎となったのであり、その意義は極めて高い。

昭和五十二年朝倉文夫氏制作の胸像（胸像は眼鏡をかけないことになっている）が関係者の御配慮により復元され、当館二階に安置されている。

昭和五十八年傳翁の随従者直町又助の四代目直町一三郎氏の篤志により、先の昭和三十三年開拓百年祭（上水）に傳翁の銅像制作者小坂圭二先生の手により、稲造博士銅像（立像）が太素塚前に建立された。

昭和五十九年十一月一日、新五千円札発券に稲造博士が登場したが、当館保存の稲造写真提供によるものであり、誠に名誉の上なく有難いことである。新券A〇〇〇〇〇一B号が当時の日本銀行総裁前川春雄氏より贈呈され、その五千円と贈呈書が原画写真と共に当館二階に保存展示されている。

九ま とめ

各時代の資料をもととしてまとめしたが、傳翁、十次郎、七郎更に稲造

が中心である。

筆者の筆不足はお許し願ひ、先人の事績をご理解頂ければ幸であり、
又ご来館頂けたら更に幸である。

(十和田市立新渡戸記念館館長)